

Title	家族ストレス論による単身赴任家族研究の試み：夫の単身赴任によって、残された家族成員、とくに妻は、いかなる困難に直面し、いかなる対処行動をとって、その困難を克服しているのか
Sub Title	Understanding family stress and coping under tanshin-funin (job-induced separating) situations : a progress report
Author	稲葉, 昭英(Inaba, Akihide) 高橋, 潔(Takahashi, Kiyoshi) 小林, 和久(Kobayashi, Kazuhisa) 浦, 光博(Ura, Mitsuhiro) 高根, 定信(Takane, Sadanobu) 南, 隆男(Minami, Takao)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1986
Jtitle	哲學 No.83 (1986. 11) ,p.251- 286
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000083-0251

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

家族ストレス論による 単身赴任家族研究の試み¹⁾

—夫の単身赴任によって、残された家族成員、とくに妻は、いかなる困難に直面し、いかなる対処行動をとって、その困難を克服しているのか—

稲葉昭英²⁾・高橋 潔³⁾・小林和久⁴⁾

浦 光博⁵⁾・高根定信⁶⁾・南 隆男⁷⁾

Understanding Family Stress and Coping under *Tanshin-Funin* (Job-induced Separating) Situations: A Progress Report

*Akhide Inaba, Kiyoshi Takahashi, Kazuhisa Kobayashi,
Mitsuhiro Ura, Sadanobu Takane, and Takao Minami*

- 1) 本研究は昭和61年度慶應義塾大学学事振興資金の援助による『現代人の「移行」(socio-cultural and psycho-developmental transitions) をめぐる総合的研究』(研究代表者：南 隆男)の一環である。本研究のためにフィールドとなっている関係各社およびそこにおける単身赴任中の社員のご家族のみなさんに心よりお礼を申し上げます。調査票の作成にあたって、二瓶正之(明治大学大学院経営学研究科博士課程)、竹村英樹・今泉伸生(慶應義塾大学大学院社会学研究科修士課程)の三君から貴重な示唆を得た。また、資料の整理およびコーディングにあたって、伊藤真哉・河合良枝・小財史子・宮島 稔・川上靖雄・石川佳世(慶應義塾大学文学部人間科学専攻南ゼミナール)の諸君にご助力いただいた。記して謝意を表します。
- 2) 慶應義塾大学大学院社会学研究科修士課程(社会学)。
- 3) 慶應義塾大学大学院社会学研究科研究生(社会学)。
- 4) 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程(組織心理学)。
- 5) 関西大学社会学部講師(社会心理学)。
- 6) 共栄学園短期大学講師(社会心理学)。
- 7) 慶應義塾大学文学部助教授(組織心理学・社会心理学)。

つい最近の朝日新聞のコラムに、河合雅雄氏（京都大学霊長類研究所教授）が「新人類」と題してつぎのような一文を寄せておられた。

がむしゃらな働きぶりを働きバチと名づけたのはだれだろう。わが国の男が精励刻苦、献身的に働いて蜜を家に運ぶ有り様によく使われるが、この言葉の発明者は少なくとも生物学者ではあるまい。ミツバチの働きバチはすべて雌だからである。雄は必要な時つくられて、女王に種つけの役を果たすだけだ。

雄と雌とが恒常的に結ばれ、両性の間に経済的分業が成立し、両性が子どもの養育にあたる、家族という社会的単位が形成されるのは、霊長類の社会進化の最終段階である人類社会においてである。ゴリラやチンパンジーの高度な社会にも、家族はないし、父親という存在はない。

父と母という両性が育児や教育に携わることこそ、サルたちと次元を異にした人間的な営為なのである。ところが、父親は今、何をしているのか。あるいは何をさせられているのか。夜遅く帰り、朝早く出て、わが子の寝顔しか見ないという明け暮れ、はては単身赴任に追いやられ、働きバチと種つけ雄の両役をやらされている始末ではないか。

家庭教育の重要性を説くのなら、また、人間らしさを求めるのなら、父親を家庭に戻すべきである。そのためには、何よりも五時に仕事終了、という企業努力がなされるべきだろう。父親不在の家族の出現こそ、新人類の誕生と言うべきである。新人類と呼ばれる若者は、不在雄という妙な父親をもつ、新人類家族の中でつくられた一品種ではなからうか。

（朝日新聞、1986年10月30日夕刊、『しごとの周辺』）

かくのごとく、この数年、いわゆる単身赴任が注目を集めている。種々の問題が取り沙汰され、新聞・週刊誌・テレビなど、いわゆるマスコミを通して伝わってくる単身赴任のイメージは、すこぶる怨嗟の響きに満ち満ちたものである。曰く、赴任者本人の自殺、残された家族の精神的負担、家計のひっ迫、赴任を拒否しての解雇およびそれをめぐっての裁判、などなど。単身赴任にまつわるこうしたことがらの真因は、しかし、奈辺にあ

るのだろうか (南ほか, 1986)。

現在, 家族持ちの転勤者のうち3人に1人が単身赴任をしている。単年度あたり, 数にして14万人強の人びとが家族と離れて暮しかつ働いている (労働省「雇用動向調査」, 1986年8月)。この数字は, 単身赴任は, もはや我々にとってさほど特異なものではなく, 慣習化し通例的なイベントのひとつとなりつつあることを物語っている。

最近の調査によれば, 企業の大半 (8割) が「転勤にあたっては家族帯同を原則」としている。うち6割強が「やむを得ない場合は単身赴任を認め, 援助する」としている (労務行政研究所「転勤をめぐる各種取り扱いの実態」, 1986年10月)。その結果が, 上述の14万人強の単身赴任者の存在というわけである。これら14万人強の人びとにとって「やむを得ない事情」とはいったい何であったのだろうか。

本稿は, 上述したごとくのいわゆる単身赴任現象の実情を理解すべく, また, 単身赴任に随伴する (と言われている) 諸問題の解決をも志向して企図された我々の共同作業の報告 (第一報) である。

1. 単身赴任へのアプローチ

単身赴任とは, 一人の人間 (赴任者本人) が会社 (企業) システムでの地位・役割と, 家族システムにおける地位・役割を共有することで生起するイベントだと考えてよい。換言すれば, 単身赴任に対するアプローチには①赴任者本人, ②会社 (企業) システム, ③家族システム, のそれぞれに焦点を置いたものが想定できるわけである。

このうち, 従来行なわれてきた研究はほとんどが①, ②の視点にもとづくものである。①の視点からは赴任者本人の孤独・健康・ストレスといったことがらが主要な分析の焦点となり, いわゆる単身赴任の実態調査とい

われるものは大半がこのアプローチをとっている（宮崎，1983など）。また②の視点からは，企業の援助措置などに着目することで労働政策的な把握が可能になる（労務行政研究所，1986など）。これに比して，③の視点に立つ研究はごく限られている。「残された家族」における生活の変化，困難性の査定といったことがらはいくつかの研究がようやく着手し出している（大塩・岡元，1985など）が，最も遅れているのがこの領域だと言わねばならない。我々はこの第三のアプローチ，すなわち「残された家族にとっての単身赴任」を研究対象に置く。

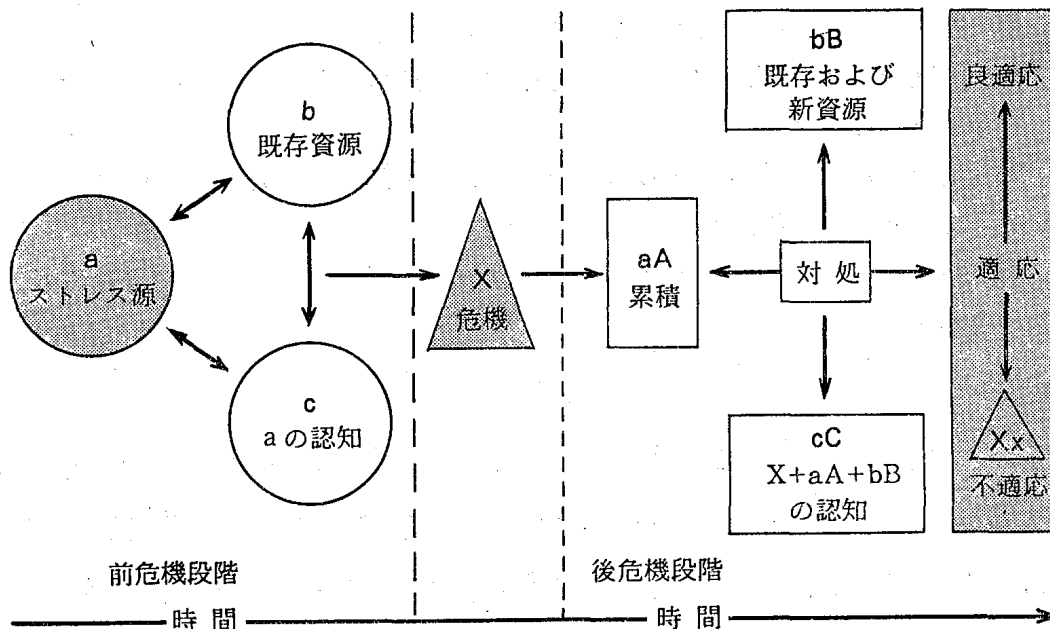
さて，残された家族に研究の焦点を合せるとき，このアプローチはより抽象的には「家族システムの危機的事態への適応のプロセス」を問題とすることである。すなわち単身赴任（＝夫の長期不在）に対して，それを家族がどう受けとめ，それに伴う困難に家族がどう適応するかが問題にされるのである。夫の長期不在が即，危機とは一概に言えないが，既存の家族の構造に何らかの変化は生起するのであり，それが経験的に危機となりやすいことは容易に言える。この立場は家族社会学における家族ストレス論の適用を可能にする。

家族ストレス論は基本的に，「どんな家族が，どんな状況下で，どんな資源をもち，どんな適応（対処）行動をともなって家族生活の困難をよりよく解決しているのか」を究明することをその研究課題とする（McCubbin *et al.*, 1980）。周知のようにその展開は，Hill (1949) の「*Families under stress*」を嚆矢とし，Burr (1973) による体系化，近年の McCubbin とその同僚たちによる精力的な研究を通じてアメリカ家族社会学の中でも理論的・実証的に最も豊富な蓄積を築き上げるに至っている。家族ストレス論は，とりわけ，戦時離別が家族に及ぼす影響（Hill, 1949; McCubbin, 1970; McCubbin *et al.*, 1975, 1976 など）の実証研究を通じて有力な理論モデルを作りあげてきた。戦時離別による夫の不在と単身赴任による夫の

不在は形式的・外面的には極めて類似した現象である。評論家的言辞を弄せば、単身赴任とは現代企業戦争における「戦時離別」と言いうるかも知れない。

家族ストレス論のなかで我々にとって特に参考になるのは McCubbin らによって提出されたいわゆる二重 ABCX モデルである (McCubbin and Patterson, 1981, 1982)。言うまでもなく二重 ABCX モデルは Hill (1949) の ABCX モデルとローラーコースターモデルを統合し、ストレスとなる出来事に直面した家族の適応過程を時間軸のなかに変数の相互連関としてとらえた、極めて汎用性の高いモデルである。

図 1 に例示したごとく、このモデルは前危機段階と後危機段階の二つの位相に大別される。前危機段階は危機発生までの過程で、危機となる出来事 (ストレス) a, 資源 b, 認知 c の 3 要素の相互連関として危機の発生 X を説明している。後危機段階は危機に対する適応過程をモデル化したもので、危機 X は他のストレスの付加によって累積 (pile-up) aA され、新規資源 bB, 新たな認知 cC のなかで展開される対処行動 (coping



(出典) McCubbin, 1981, P. 9.

図 1 二重 ABCX モデル

behavior) を通じて一定の適応状態に達するとされる。家族の適応とはここでは良適応 (bonadaptation) から不適応 (maladaptation) までの連続体として示され、家族の一定の機能遂行状態のことをさす。

McCubbin らによるこのモデルは、危機適応を時間的プロセスとして、さらにはフィードバック・ループを組み込んだ連続的運動過程としてそれをとらえたこと、資源概念の中にソーシャル・サポート (social support) をはじめとするコミュニティ資源を取り入れたこと、同時並行的に生起するライフ・イベントの影響をその射程に含めて危機の累積という文脈的視点を導入したこと、そして実践的な観点に立つとき重要な意味を持ってくる対処行動の概念をその中に位置付けたこと、で高く評価されるべきである。我々は、この二重 ABCX モデルを我々の研究に積極的に適用する。

我々の研究課題は、かくして、以下のような具体的な質問 (research questions) へと変換される。

- ① 残された家族はどんな困難 (=家族ストレス) を経験するのか?
- ② どんな要因がその困難を規定するのか?
- ③ 困難を克服・除去するために家族はどんな対処戦略 (coping strategy) をとるのか?
- ④ 効果的な対処戦略はどのようなものか、またそれはどんな要因によって規定されるのか?
- ⑤ 家族の適応 (family adaptation) はどんな要因によって規定されるのか?

すなわち、①、②は二重 ABCX モデルの X 要因に着目したもの、③、④は同様にその対処行動に着目したもの、⑤は家族適応 (Xx要因) に着目したものである。我々のとる単身赴任へのアプローチとは、残された家族が単身赴任というイベント (=ストレッサー) にどう適応していくか、またその適応過程における困難性・対処戦略・家族適応のそれぞれのヴァ

リエーションはいかなる要因によって規定されるのか、の解明にほかならない。我々のこうしたアプローチは必然的に実態調査・発見的側面と、家族ストレス論の命題検証という二つの側面をもつことになる。いうまでもなく、両者は相互補完的な関係にあり、家族ストレス論の導入が事態の構造を明晰化する可能性をもつと同時に、その経験的妥当性が問われることで家族ストレス論そのものの検証一彫琢が推進されるのである。

2. 家族システムのイメージ

我々の今回の試みは家族ストレス論に大きく依拠するものではあるが、家族ストレス論自体がいくつかの理論的問題を内在させている。

最も大きな問題は「家族の適応」という概念の曖昧さである。McCubbinら(1982)は、「家族に対するメンバーの、およびコミュニティに対する家族の、それぞれのレベルにおける安定した適合を達成しようとする家族の努力を反映した結果の連続体」と定義している。しかし、これではあまりにも操作性に欠ける。実際、各研究者によって経験的に用いられる家族適応の指標はまちまちである。このこと背景には、家族ストレス論がその理論の根本に置いている家族のモデルが不明瞭であり、またそれについて立ち入った検討がなされていないことがあげられる。さらには、家族というシステム・レベルのストレスと個人レベルのストレスの区別が不明瞭なことも事態をより混乱させている。これらの混乱を整理するには、まず家族の理論モデルを明確化し、システムと個人をそこに明示することが必要とされるのである。

家族ストレス論では基本的に家族をシステムとして把握する。この場合、家族とは一定の親族的位座占有者がその位座に応じてとる顕在的・潜在的役割行動の累積体として概念化される。当然ここで役割行動の性格が

問題となってくる。

森岡 (1983) は、家族内役割を集団的役割と関係的役割の二つに類型化し、構造化された役割と構造化されていない役割を両極において識別することを企図している。役割の構造化・非構造化という視点は Hansen and Johnson (1979) の「確立された相互作用パターン」(established pattern)/「創出的相互作用パターン」(institutive pattern) の類型や, Aldous (1978) の「二者関係的位座」(paired relationships) の議論中にも含意されている。役割のとらえ方としてこの視点が大筋の一致を見ているとあってよいだろう。

我々はこの役割概念をシステムの機能的要件と関連づけて定義したい。すなわち、集団的役割とは家族の社会的要件を充足するための役割、関係的役割とは家族成員個人（自己）の欲求を充足するための役割として、当該役割が充足する対象の要件そのものの違いとしてより明確にこれを定義する。この定義は、役割行動の視角からシステムの要件と個人の欲求を区別することで、結果としてシステム・レベルのストレスと個人レベルのストレスを識別する可能性を与えている。

家族の社会的要件とは、「家族がすべきこと」「当然家族がやるべきこと」として成員個々人が内面化している家族についてのイメージであり、いわゆる「成員の福祉追求」という概念によってその性格を包括しうる。しかし、「家族成員の福祉の追求」はあくまでもシステムの要件であって役割遂行者本人の欲求充足とは質的に別個である。成員個人の欲求とは「自分がしたいこと」「自分のためにしてほしいこと」として個々人に意識されるものと言い換えることができる。家族システムの何よりの特徴は、この両者、つまり家族の社会的要件と成員個人の欲求が直接規定しあわないことにある。

個人はいくつもの集団に一定の地位と役割をもち、その中で様々な欲求を充足させている。家族もそうした集団の一つであり、個人は「家族のた

め」「他の家族成員のため」に集団的役割を通じてその社会的要件を充足し、一方でその要件充足によって一定の欲求充足を得るのであるが、要件充足それ自体は必ずしも行為者本人の欲求充足を目的として遂行されるものではないのである。それはあくまで「成員の福祉追求」という家族のイメージに基いて行なわれるのであって、「そうすれば自分のためになるから行なう」のではない。換言すれば、システムからの報酬ゆえに行為者は集団的役割を遂行するのではない。あくまでシステムの社会的要件と個人の欲求はこのような形で区別され、また両者は直接にあわないことをここで再度確認しておこう。

以上のような関係から、社会的要件の充足が特に個人の欲求充足を阻害することがないとき、それは自明化しより構造化されるということができ、日常的な家族の集団的役割はこうした、自明化・構造化されたなかで反復されているから、このあり方が個人によって問われることは減多になく、その意味で家族の変動は容易に起こらない。しかしそれが家族内外での個人の欲求充足の機会を制約し阻害するような時、はじめて社会的要件が意識され、そのありかた自体が個人によって問われる。その際でも、社会的要件としての「福祉追求」が個人の欲求と両立するような形で修正が行なわれるのであり、修正された要件ならびにそれを充足する集団的役割自体は行為者個人の利害の論理では動かない。

こうした家族の社会的要件（社会的に果たさなければならない課題＝イメージ）、およびその内面化の度合は当然個々人のレベルでは均一ではない。そこには、その違いにもとづくコンフリクトの存在が可能性として常に内包されている。しかし、個々人が持つそのイメージがある程度社会的に共有され、それが社会的事実として個々人に内面化されているからこそ、社会的に家族に共通する行動パターンが成立していると考えられるのである。こうした家族の社会的要件の具体的諸相はモータルなものとして研究者によって抽出されるよりほかに具体化することはできない。

一方で、家族内にはこうした集団的役割とは別個に、成員が自己の欲求充足を志向した関係的役割が存在する。集団的役割ではあくまで内面化されたイメージ・規範に基づいて役割行動が展開されるのであって、この関係的役割では自己の欲求が意識化される点はその違いである。日常的にこうした関係的役割は創出され、また消滅する。結果的に集団的役割と関係的役割は構造化・非構造化という概念と重なりあう。前者が社会的事実として、後者が個人によって創出され形成される役割としてとらえられるからである。

このように考えることで初めて、広義の家族ストレスという概念の中に混在していたシステム・レベルのストレスと個人レベルのストレスを識別する可能性が生まれる。システム・レベルのストレスとは社会的要件の非許容充足状態（吉田，1974）、個人レベルのストレスとは個人の欲求の非許容充足状態と定義することができる。ここで注意すべきは後者の概念で、家族ストレス論で扱われるのは個人の欲求充足状態すべてではなく、あくまで家族に関連した部分での個人の欲求充足ならびに不充足である。後に述べるごとく、我々はこれを関係的役割による欲求充足、役割行動の制約・負担、一般的欲求充足、の三指標の合成から把握を試みている。

寝たきり老人の世話という例をあげてストレスについての上述の二概念を説明しよう。通常「親の世話は子がするもの」という家族が果たすべき課題についてのイメージがあり、この世話がうまく行かなければシステム・レベルのストレスとすることができる。一方、世話がうまくいっていてもそのために家族内外での様々な欲求充足機会を失なう個人にとっては、それは個人レベルのストレスを生起させるものとなる。いわゆる家族ストレスと総称される概念の中にはこの二者のレベルでのストレス（＝非許容充足状態）が理論的に存在する、と我々は考える。すなわち、家族のストレス状態とは、家族の社会的要件・成員の欲求の双方、あるいは、一方の非許容充足状態として定義される。

従来の家族ストレス論がここで言うところの「家族(の社会的要件)のストレス」と「個人(の欲求)のストレス」を識別してこなかったことは大いに反省すべきである。この原因は明らかに、前提としての家族のモデルを明確にせぬまま実証研究に専ら着手していたことに求められる。

McCubbin and Patterson (1983^a) は、ストレスとは「家族の機能遂行における現実の、あるいは、知覚された要請 (demand) —能力の不均衡から生じる状態で、また順応あるいは適応行動を要する多面的な要請によって特徴づけられる状態である」と定義している。それはイベントに内在する困難ではなく、あくまで「家族の反応の関数」(McCubbin *et al.*, 1980)とされているが、この定義を我々なりに解釈し直すと、何らかのストレス・イベントによって家族の社会的要件ならびに家族成員の欲求の双方、または、いずれかの充足度が低下し、要件充足能力(例えば、家族の持つ資源など)がそれを再び許容充足化できないときに、いわゆる「家族ストレス」状態が生じると考えられるのである。

以上の帰結として、集団としての家族の状相を、この両者の充足状態に着目して、表1のように四つに類型化することができる。紙幅の関係から詳しい説明は別稿に譲るが、この視点からは家族成員各人にとって家族の状相が異なってくることになり、一口に家族ストレスといってもそれは逸脱(状相②)、抑圧(状相③)、および危機(状相④)の三つに細分されることになるのである。

表1 家族システムの状相

成員個人の欲求充足	社会的要件の充足	
	許容充足(+)	非許容充足(-)
許容充足 (+)	①相補性(+, +)	②逸脱 (-, +)
非許容充足(-)	③抑圧 (+, -)	④危機 (-, -)

(註) 状相の命名については、渡辺(1981)を参考にした。

さて、何らかのかたちで「家族ストレス」状態に陥った家族あるいは個人はその要件充足度の低下に対して何らかの資源を動員したり、自ら働きかけたり、あるいは認知を変化させることで要件を許容充足化しようと努める。この一連の行動的・認知的対応が「対処戦略」(coping strategy)である。すなわち、対処戦略とは家族の社会的要件／成員個人の欲求のいずれか、あるいは、双方の許容充足化を志向した行動的・認知的対応、と定義することができる。先の状相移行論に関連づけて言えば、対処戦略とは②、③、④のいずれかの状相にある家族／家族成員が、①の状相への移行を目指してとる一連の対応、と言うこともできよう。

一定の家族ストレス状態に陥った家族ならびに家族成員がとる対処戦略によって時間的経過とともに家族の社会的要件／成員個人の欲求の充足度は変化する。いわゆる家族適応とはこうした一定の時点での家族の社会的要件／成員個人の欲求の充足状態（換言すれば、機能遂行状態といってもよい）のことをさす。つまり、理論的には「家族ストレス」も「家族適応」も家族の社会的要件／成員個人の欲求の充足状態によって把握されるのであり、その違いは一定の時点間の相違ということである。

これまでの家族ストレス論は少なくともこうした理論的説明を何ら成しえぬまま家族適応という概念を使用してきた。その結果、研究者によって経験的に用いられる家族適応の指標・内容がまちまちになることになった。これは McCubbin の一連の研究においてもしかりである。紙幅の都合ゆえさらなる理論的検討は別稿にまわし、以下ではこの家族に関する理論モデルに基いた我々の実証研究へ向けての作業の報告へと移りたい。

3. 経験的調査に向けて

ここでは既述の家族のモデルに従って、家族が危機に直面し、適応する過程についての探索的分析枠組（＝変教の相互連関）が検討される。全変

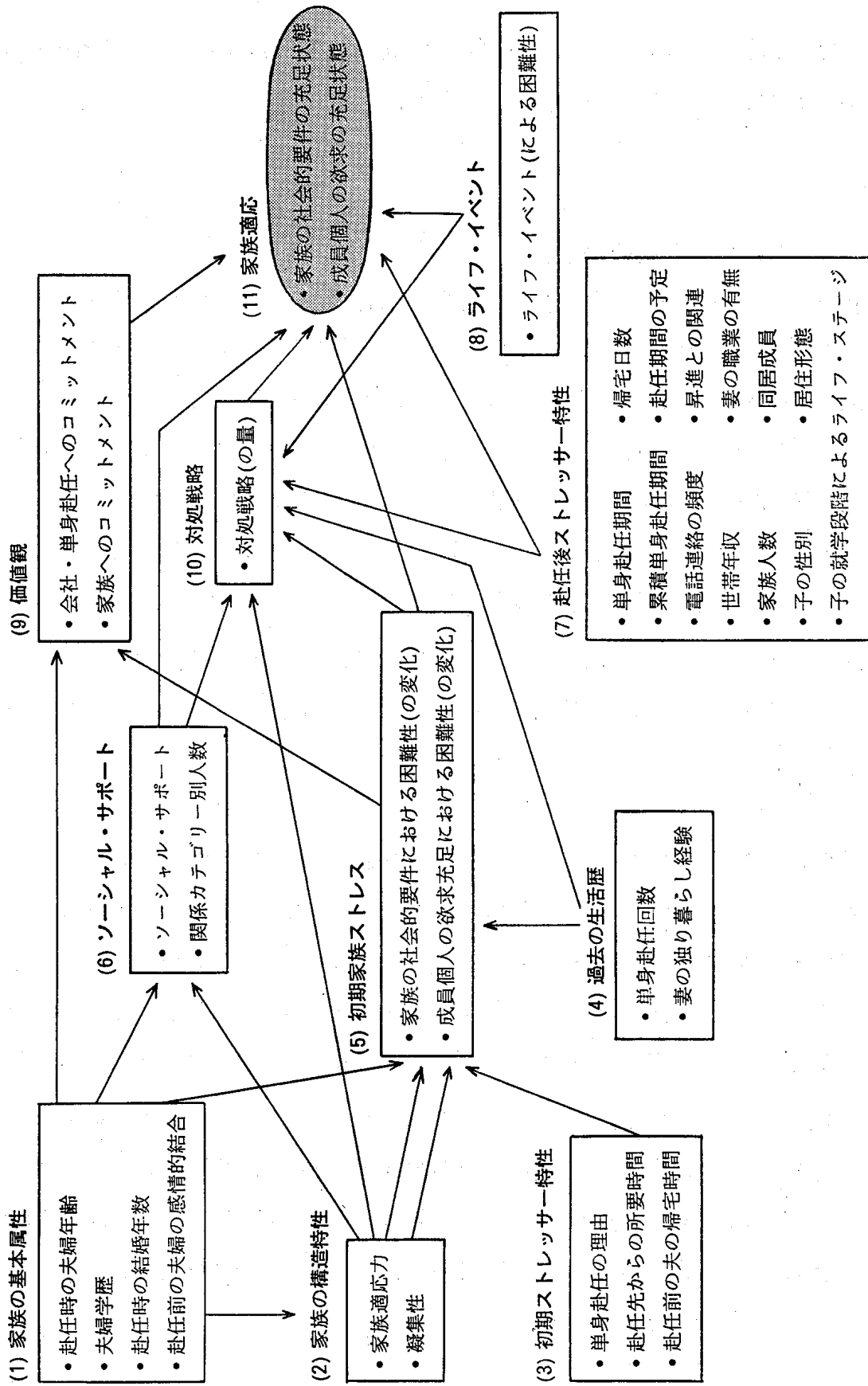


図2 探索的分解的枠組

数の相互連関については図2に一括して提示した。以下に各変数を説明しながら具体的な質問項目をも列挙しよう。

(1) 残された家族の困難性 (初期家族ストレス)

我々の言うところの「残された家族の困難性」とは、既述の「家族ストレス」とほぼ同義である。すなわち家族の困難性というとき、そこには社会的要件と個人の欲求という二つの下位変数が必要とされるのである。

単身赴任によって残された家族に生ずる困難性は、単身赴任以前に家族に内在する困難とは区別されねばならない。すでに単身赴任中の家族を調査対象としたので、今回はこれを「困難性の変化」としてとらえる。すなわち、家族の社会的要件および個人（我々の今回の研究では当面、妻のみを問題とするので、この場合、妻）の欲求双方における充足状態の変化を、困難性をとらえる指標とする。そして、仮にこれを初期家族ストレスと呼んでおく。

① 家族の社会的要件における困難性 (初期家族ストレス—家族)

家族の社会的要件の具体的内容は、森岡 (1983) の家族の役割構造についての分析を参考にし、修正した上で、以下のよう設定した。すなわち、(1)家計(経済的充足性)、(2)家事、(3)子供の養育・社会化、(4)老親の扶養・病人の介護、(5)渉外(家族の社会的ネットワークの維持・活用)、(6)緊張処理・統合、である。これらが夫の単身赴任によってどれだけ困難性を増減させたかを問うことで家族の社会的要件における困難性の把握を試みる。(1)~(6)につき、5点尺度で各3項目ずつ計18項目を配置し、具体的には表2のような質問項目を列挙している。各項目の点数を加算して各領域についての困難性を把握する。

表2 家族の社会的要件における困難性

今回、ご主人が単身赴任されたことによって、ご家族の生活もいろいろな点で変化したことと思います。あなたのご家族の場合、次のようなことは、どのように変わったのでしょうか。単身赴任をされる前と、赴任直後のようすをおくらべになって、実情に最も近いと思われるものの番号に○印をしてください。

● I 家 計

- 1 (1) 出費がかさんで困ること
- 2 (7) 将来にむけての貯蓄計画が思うようにいかないこと
- 3 (17) 娯楽や物品の購入などに思うように出費ができないこと

● II 家 事

- 4 (2) 食事のしたくやあとかたづけが、おろそかになること
- 5 (8) うちの中のそうじ、かたづけが、おろそかになること
- 6 (15) 洗たく、アイロンがけなどが、おろそかになること

● III 子供の養育・社会化

- 7 (3) 子供のしつけや世話に、十分目がゆきとどかなくなること
- 8 (9) 子供の教育への目くばりや、勉強の相手が思うようにできないこと
- 9 (13) 子供の気持ちを十分にくみとれないこと

● IV 老親の扶養・病人の介護

- 10 (4) ご主人の親の世話が十分にできないこと
- 11 (10) あなたご自身の親の世話が十分にできないこと
- 12 (14) 病気をした(している)家族のめんどうを、十分に見れないこと

● V 渉 外

- 1 (5) 親せきとのつきあいが、思うようにできないこと
- 14 (11) 近所の人とのつきあいが、思うようにできないこと
- 15 (18) 家族ぐるみでつきあっていた友人や知人とのつきあいが、思うようにできないこと

● VI 緊張処理・統合

- 16 (6) 家族でのレクリエーションや娯楽の機会が、十分持てないこと
- 17 (12) 家族の人どうしの気持ちがしっくりしないこと
- 18 (16) 家族の人どうしでの必要な相談や話し合いが、十分に出来ないこと

(註)回答は、少なくなった/やや少なくなった/変わらない/やや多くなった/多くなった、の5件法による。()内の数字は、実際の調査票上での配列順序を示す。

②家族成員個人の欲求充足における困難性（初期家族ストレス—個人）

既述のように、広義の家族ストレスには成員個人の欲求充足における困難性も含まれる。しかし、この概念は単純ではない。ここでは個人の欲求充足において家族に関連するもののみをとりあげる。すなわち、(1)家族で得られる一定の欲求充足、(2)集団的役割行動の負担・欲求充足にたいしての制約、という利益とコストの両者を取りあげる必要がある。

既述のごとく家族は通常の世界システムとは異なって、役割行動とシステムからの報酬が必ずしも交換的でない点が重要である。つまり、システムの要件（＝家族の社会的要件）を充足する集団的役割は、必ずしも利害・交換に基いて行なわれるのではない。すなわち、個人の欲求充足はまず(1)-1 関係的役割、によって得られる。(2)については、集団的役割は交換を前提とはしないが、集団的役割が個人の他の（家族内外での）欲求充足の機会を制約したり負担となる時、個人の欲求充足は阻害される。ここで、(2)集団的役割行動の制約・負担、という変数を個人の欲求充足にとって重要なものとして取り上げることになる。すなわち、家族の集団的役割がどれだけ個人の欲求を充足するか、ではなく、欲求の充足に対してどれだけ制約・負担となるかが問題とされるのである。また、家族という場で、かならずしも役割関係によるのではない欲求の充足が図られる。経験的にはややとらえにくい概念であるが、心理的安寧 (psychological well-being) の概念はほぼこれに相当すると見なしてよい。これをとりあえず(1)-2 一般的欲求充足、と呼ぶことにしよう。

こうして、家族成員個人の家族に関連した欲求充足を把握する変数として、(1)関係的役割による欲求充足、(2)集団的役割行動の制約・負担、(3)一般的欲求充足、という三つを取り上げることにする。なお、集団的役割による欲求充足は①の初期ストレス—家族の変数内に包含されると考えられるためここではとりあげない。以上のそれぞれにつき、5点尺度で各5項目ずつ計15項目を配置し、同様に各項目の点数を加算してそれぞれの困難

性の変化をとらえたい。具体的な質問項目は表3のごとくである。

表3 個人の欲求充足における困難性

ご主人の今回の単身赴任によって、あなたご自身の毎日の生活もいろいろな点で変化したことと思います。次のようなことがらは、どのように変わったのでしょうか。単身赴任前と、単身赴任直後のようすをおくらべになって、実情に最も近いと思われるものの番号に○印をしてください。

● I 関係的役割による欲求充足

- 1 (2) 何かあったとき、家族の中には相談する相手がいない、と思うこと
- 2 (7) 性生活に不満が残ること
- 3 (8) 子供が自分の思うとおりにしてくれない、と感じること
- 4 (11) 同居している親が、自分の思うとおりにしてくれない、と感じること
- 5 (14) 落ちこんだ時などに、はげましてくれる相手が家族の中にはいない、と感じること

● II 役割行動の制約・負担

- 6 (3) やりたいことをやれる時間がへること
- 7 (6) 夫のかわりをすることで疲れを感じる
- 8 (9) 夫の赴任先に行ったり、夫の身のまわりの世話をすることで疲れ
- 9 (12) 友達つきあいなどの時間がへること
- 10 (15) 家庭内での自分の責任が重すぎる、と感じること

● III 一般的欲求充足

- 11 (1) うちにいても、さびしさを感じる
- 12 (4) うちの中でくつろげない
- 13 (5) 防犯(戸じまりなど)や防災(地震など)に不安を感じる
- 14 (10) うちの中に、話し相手がいないと感じる
- 15 (13) うちにいる時イライラすること

(註) 回答は、少なくなった/やや少なくなった/変わらない/やや多くなった/多くなった、の5件法による。「家族適応」における「個人の欲求の充足状態」での回答は、ほとんどない/少ない/どちらかといえば少ない/どちらかといえば多い/多い、の5件法による。()内の数字は、実際の調査票上での配列順序を示す。

(2) 困難性を規定する要因

家族が経験する困難性（社会的要件／個人の欲求）は、家族の基本属性、初期ストレッサー特性、過去の生活歴、家族の構造特性（家族資源）、に規定される。

① 家族の基本属性

家族の基本属性とは、赴任時の夫婦の年齢、夫婦の学歴、赴任時の結婚年数、赴任前の夫婦の感情的結合といった変数が相当する。

② 初期ストレッサー特性

単身赴任の理由、赴任先からの所要時間、赴任前の夫の帰宅時間という変数、つまり認知的要素が介在しない、その家族にとっての単身赴任の特性を指している。

③ 過去の生活歴

単身赴任回数、妻の独り暮らし経験といったこれまでの人生経験を査定する変数を置いている。過去にこうした経験をもっている者は夫の不在という事態をより受容し易い、と考えられる。

④ 家族の構造特性

家族の構造特性とは我々が名づけた名称であり、通常、家族ストレス論では家族資源（family resources）と呼ばれている変数がこれに当てはまる。

家族ストレス論では Hill (1949) の ABCX モデル以来、その B 要因すなわち家族のもつ危機対応資源に常に注目し、それによって家族のストレス

に対する適応のバリエーションを説明する有力な要因としてきた。McCubbin (1980) はこの家族の危機対応資源を、(1)家族成員の個人的資源、(2)家族システムの内部資源、(3)ソーシャル・サポート、(4)対処行動、の四つに分類している。McCubbinらはこれらを一種の能力としてとらえているため、対処行動も資源の分類に加えている。しかし、資源そのものと行動レベルにある対処行動とは概念的に、一応、別個のものと考えたほうがとらえやすいだろう。

既存の研究ではとくに資源として上述の(2)と(3)が重要視されている。我々の言う家族の構造特性とは(2)の家族システムの内部資源と同じである。なお、ソーシャル・サポートについては初期ストレスを規定する要因としてではなく、対処行動および家族適応を規定する要因としてこれを取り上げたい。

ところで、家族システムの内部資源を測定するモデルとして Olson (1979, 1983) らの円環モデル (circumplex model) が注目される。このモデルは Burr (1973) の提出した家族資源の中から「家族適応力」(family adaptability) と「凝集性」(cohesion) の二変数に特に着目し、それぞれを組み合わせる家族資源の布置状態について16に分類し、ストレスに対する適応のバリエーションを説明することをねらったものである。家族適応力とは「状況や発達に伴なうストレスにたいして勢力構造・役割関係・ルールを変化させるような家族システムの能力」と定義される (Olson, 1982)。要約すれば役割構造・勢力構造など Homans (1951) の言うシステムの外部的体系に相当するものの柔軟性、ということになる。また凝集性とは「家族成員が相互に持つ情緒的結合および成員個人が経験する自律の程度」と定義される (Olson, 1982)。情緒的統合性あるいは Homans の言う内部的体系の統合性・緊密性、といってもよいだろう。

しかし、これら二変数の実際の使われ方は様々である。例えば、McCubbin and Patterson (1983b) では家族適応に相当する変数として（つまり結果変数として）使われており、また Lavee ら (1985) では家族資源として（説明変数として）使われている。我々は後者の使い方に習い、説明変数としてこれらを採用する。さらには、これら二変数の性格と使用法を考えたとき、家族資源という名称よりも家族の構造特性という名称のほうがより適切に思われる。資源とは通常、加工・変換できる素材として概念化されているが、ここで言う家族適応力と凝集性がその範疇に含まれるかどうかは微妙である。むしろ役割構造の柔軟性／情緒的統合性といった概念で提示されるようなこれらの変数は、家族の構造特性と言い換えたほうがより解りやすい。よって、我々は以後これらを総称して家族の構造特性と呼ぶことにしたい。

Olson らは家族適応力と凝集性を FACES (Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scales) という尺度によって測定している (Olson, 1982)。我々も FACES を参考にしながら表 4 のように質問項目を作成した。5点尺度で、各 4 項目ずつ、それぞれ加算してその点数とする。仮説的には、集団の情緒的統合性が高いほど夫の不在のもたらす困難性は大きくなり、また、役割構造が柔軟であるほど夫の不在は容易に受容されると考えられる。

(3) 家族の対処戦略

既述のように、対処戦略とはストレスラーによって惹き起こされた社会的要件／成員個人の欲求の双方、または、いずれかの充足水準の低下にたいし、家族ならびに家族成員がその許容充足化をめざしてとる一連の行動的・認知的対応のことを指す。多分に試験的なものではあるが、この対処戦略は表 5 のように類型化される。

表4 家族の構造特性

以下のようなことがらは、あなたのご家族ではどんな感じでしょうか。現在の状況ではなく、今回の単身赴任をなさる以前のふだんのようにすについておうかがいします。

● I 家族適応力

- 1 (1) 子供にかかわることがらをきめる時、うちでは必ず子供の意見を聞いていた
- 2 (3) うちでは、食事のしたく、そうじ、子供の世話などは、必要に応じてやる人を変えていた
- 3 (5) 家族に関する重要なことがらを決める時、うちでは最終的には夫が決めていた
- 4 (7) うちでは、意見の対立がある時、みんなが納得いくまでとことん話しあっていた

● II 凝集性

- 5 (2) うちでは、よく、家族そろって旅行したり、食事に出かけたりしていた
- 6 (4) うちでは、一日に一度は家族全員が顔をそろえていた
- 7 (6) うちの家族は、いっしょに住んでいたけれどもお互いに気持はバラバラだった
- 8 (8) うちでは、家族のみんなが、職場や学校でのお互いの生活についてよく知っていた

(註) 回答は、そんなことはなかった/どちらかといえばそんなことはなかった/どちらかといえばそうだった/そうだった/かなりそうだった、の5件法による。()内の数字は、実際の調査票上での配列順序を示す。

表5 対処戦略の類型

目 標	行 動 の 方 向 性	
	構 造 維 持	構 造 変 動
社会的要件の充足	① 外部資源の導入	② 役割構造の修正・変更
自己の欲求の充足	③ 感情表出	④ 欲求の転位
共 通	⑤ 充足水準の下方修正	⑥ ストレッサーそのものの除去

表6 対 処 戦 略

いままでの質問でおたずねしたように、ご主人の単身赴任によって、ご家族に困った問題や不満なこと、さびしくなることなど、いろいろなことが起きたこととおもいます。その際、どうやってそれに対応なされたのでしょうか。いろいろな対応の仕方があったとおもいますが、特に以下にあげるような対応の仕方をそれぞれどれくらいとったか、教えてください。

● I 外部資源の導入

- 1 (1) 親せきの人に、助言や援助を求めた
- 2 (7) 近所の人に、助言や手助けを求めた
- 3 (13) 親しい友人に、助言や手助けを求めた
- 4 (19) 単身赴任についての経験談、手記や本などを読んで参考にした
- 5 (24) 会社の人（夫の上役・同僚や同じように単身赴任を経験している人）にいろいろ相談した
- 6 (30) 専門家（たとえば弁護士、医者、教師、地域相談員など）に相談した

● II 役割構造の修正・変更

- 7 (2) 子供に対して父親のかわりもつとめた
- 8 (8) 家計の補助のために新たに自分も働きだした
- 9 (14) 子供にも家事（かたづけやそうじなど）を手伝わせるようにした
- 10 (20) 夫のいままでしていたことを、家族で分担するようになった
- 11 (25) 自分が家族をまとめ、長として家を代表するようになった
- 12 (31) 家族のみんなまで話しあって、自分のことはなるべく自分でするようにとり決めた

● III 感情表出

- 13 (3) 話やグチを人に聞いてもらった
- 14 (9) お酒などを飲んで気分をまぎらわした
- 15 (9) 夫に不平・不満をぶつけた
- 16 (21) 泣いて気をはらした
- 17 (26) 心のなかで、神や仏に頼ったり祈ったりした
- 18 (32) 自分の気持を日記につづったり、文章に表現したりした

●IV 欲求の転位

- 19 (4) 趣味にうちこんだり, 新しい趣味をはじめたりした
- 20 (10) サークルやPTA, 地域活動, 政治活動などに参加した
- 21 (16) なにかの資格をとったり, 新しい技能を身につけたりした
- 22 (27) 友人とのつきあいを深めたり, 新たに友人をつくったりした
- 23 (33) 子供のことに没頭するようになった
- 24 (36) 宗教活動に参加した

●V 充足水準の下方調整

- 25 (5) 「他の人たちにくらべれば, 自分はめぐまれているのだ」と言いきかせた
- 26 (11) 「夫が単身赴任しているような状況では, 不満なことが多いのもしかたがない」とあきらめた
- 27 (17) 「自分の望みが高すぎるのだ」と思うようにした
- 28 (22) 「今まで自分はめぐまれすぎていたのだ」と思うようにした
- 29 (28) 「今の生活でも満足できる」と思うようにした
- 30 (34) 「なかなか自分の思い通りにはならないものだ」とあきらめた

●VI ストレッサーそのものの除去

- 31 (6) 単身赴任をやめるように夫に頼んだ
- 32 (12) 会社の人に単身赴任を早く終わらせてくれるようお願いした
- 33 (18) 単身赴任制度の問題点を, 投稿などを通じてうったえた
- 34 (23) 夫に離婚話をもちかけた
- 35 (29) 組合などに単身赴任制度を見直すようはたらきかけた
- 36 (35) 家族ぐるみで引っ越しをして, 夫と同居することを検討した

(註) 回答は, そんなことはしなかった・していない/まれにそうした・そうしている/ときどきそうした・そうしている/しばしばそうした・そうしている/常にそうした・そうしている, の5件法による。()内の数字は, 実際の調査票上での配列順序を示す。

表5における対処戦略の類型は, その目標と対応の方向性とを組み合わせ設定されている。目標は, その戦略がどの要件の許容充足化を志向しているかによって三つに類別される。また, 対応の方向性とはそれが現在

の構造を維持する方向か、あるいは現在の構造自体を変化させる方向にあるか、という視点から構造維持・構造変動の二つを類別している。対処戦略の類型についてはこれまでほとんど注目がなされてこなかった。我々の提示する類型はあくまで仮説的なもので、こうした類型についてさらに検討を要さねばならないだろう。

類型の①外部資源の導入とは、家族の構造の維持のためにネットワーク資源や様々な情報を導入する一連の行動を指し、②役割構造の修正・変更とは、家族構造自体を変化させることで危機を解消しようとする行動群を指す。③感情表出とは、欲求そのものを維持しながらその不満を表出することで危機を解消する一連の行動群のことである。④欲求の転位とは、欲求の構造自体を変更し、他の対象にそれを転位する行動群を指す。⑤充足水準の下方調整とは、家族・欲求の構造を維持する方向で認知的に現実を許容化する（許容充足水準を低下させる）ことで危機の解消を図る一連の対処を意味する。⑥ストレッサーそのものの除去とは、文字通り危機の出所そのものを解消しようとする一連の行動群を指す。これらの各類型につき5点尺度で6項目ずつ、計36項目が表6のように配置され、各類型ごとに点数を加算してその得点とする。

(4) 効果的な対処戦略・対処戦略を規定する要因

効果的な対処戦略とは、対処戦略の6類型と次の(5)で述べる家族適応の関係を分析することで明らかにされる。従ってこれは発見的な分析となる。

対処戦略を規定する要因として我々がとりあげるのは過去の生活歴、残された家族の困難性、ソーシャル・サポート、赴任後ストレッサー特性、ライフ・イベント、価値観といった変数である。このうち、過去の生活歴、残された家族の困難性については既に触れた。ここではまず、ソーシャル・サポートから順に解説したい。

① ソーシャル・サポート

ソーシャル・サポートは近年コミュニティ・メンタル・ヘルスや社会心理学の分野で注目を集めている概念である。しかし、その定義も様々であり、さらに理論的な難題をいくつも負っている概念でもある。

家族ストレス論では McCubbin (1980) らがこの概念を特に Cobb (1976) の定義に準拠してとりあげたのが最も早いものだったようである。Cobb によれば、ソーシャル・サポートとは「情緒的援助、尊重的援助 (esteem support)、ネットワーク援助をもたらす、個人間のレベルで交換される情報」と定義される。このほかにもいくつかの定義が存在するが、特にコンセンサスを得ているものはない。ここでの最大の問題は、ソーシャル・サポートが果たすとされる健康増進機能およびストレス緩衝機能のメカニズムを理論的に説明できないことにある。Thoits (1985) はこうした点を検討し、ソーシャル・サポートとは、結局、重要な他者たちを含む役割関係から得られる「内的満足」である、としている。このように様々な問題を内包しているものの、ソーシャル・サポートは一定の重要な他者たちを含む人々との関係のなかで得られる様々な援助に着目した概念であり、客観的なサポートよりも知覚されたサポートが重要であることは大筋の一致を見ている。

ソーシャル・サポートの測定法も様々である。Sarason ら (1983) の Social Support Questionnaire (SSQ)、Procidano and Heller (1983) の Perceived Support Scale (PSS) などがよく使われるものだが、我々は Cohen ら (1985) による Interpersonal Support Evaluation List (ISEL) を修正・変更のうえ使用する。前二者の測定法ではサポートがその機能カテゴリーに区分されていない。ISEL は評価的サポート (appraisal support)、所属的サポート (belonging support)、実体的サポート (tangible support)、自己尊重 (サポート) (self-esteem) の四つを区分している。

(1)評価的サポートとは個人の意思決定に際し準拠となるような援助、(2)所属的サポートとは情緒的な意味合いでの時間的共有、(3)実体的サポートとは手段的な(有形の)援助、また(4)自己尊重とは他者との比較によって、自己の存在意義の確立を可能にするような援助を指し、これらについての知覚された入手可能性を問うものである。Cohenらは各項目をカテゴリカルな変数として扱っているが、我々は5点尺度にしてそこに量的要素を加えている。また、自己尊重についてはやや異質でありISELの質問項目も不適切に思われたので試験的に1項目のみを使用することにした(表7を参照)。

なお、SSQ的なネットワーク・レンジの査定もソーシャル・サポートの構造把握にとって重要と考え、これを「関係カテゴリー別人数」という項目を別に設けることで補っている。この質問項目の掲載は割愛するが、「いざという時、頼りなる人が何人くらいいるか」について、親せき・友人・近隣という三つの関係カテゴリー別に尋ねることでISELを補足するものとなっている。

②赴任後ストレッサー特性

ここでは単身赴任が始まってからの様々な特性を総称してこう呼んでいる。ストレーン期間、累積(今回以前の単身赴任も含めた)ストレーン期間、赴任中の帰宅日数、赴任中の電話・手紙などの頻度、赴任期間の予定、昇進との関連、世帯の年収、妻の職業の有無、家族人数、同居している成員の関係カテゴリー、子の性別、子の就学段階によるライフ・ステージ、居住形態、などの変数が具体的にはあげられる。我々の調査はとりあえず遡及的な方法をとっているため、これらの変数は初期の家族ストレスではなく家族適応を規定する変数となる。

表7 ソーシャル・サポート

あなたご自身と、家族以外の人々(友人・親せき・近所の人など)とのかかわりについておききします。あなたには、現在、以下のようなことがらでかかわりのある人がどのくらいいるのでしょうか。あてはまる番号に○印をしてください。

●I 評価的サポート

- 1 (4) 家族の中でもめごとが起こったとき、どうしたらいいか気安く相談に行ける人、が
- 2 (8) 自分自身に個人的な心配事や不安がある時に、どうすればよいか親身に助言してくれる人、が
- 3 (9) 家族以外で、「100パーセント信用できる」という人、が

●II 所属的サポート

- 4 (1) おりあるごとに行き来する友達や親せき、が
- 5 (2) 一緒に会って、とても楽しく時をすごせる人、が
- 6 (5) さびしい時などに電話をしたり、訪ねていっておしゃべりができるような人、が

●III 実体的サポート

- 7 (3) 1～2週間、家をあけるような時に、安心して家のめんどう（緊急の連絡や荷物のあずかり、ペットの世話など）を頼めるような人、が
- 8 (6) 急に2～3万円のお金が必要になった時、気がねなく借りられる人、が
- 9 (10) 引っ越しなど、ひとでがいる時に気軽に手伝いを頼める人、が

●IV 自己尊重

- 10 (7) あなたご自身のことをかってくれたり、高く評価してくれる人、が

(註) 回答は、全くいない/あまりいない/少しはいる/何人もいる/かなりの数いる、の5件法による。()内の数字は、実際の調査票上での配列順序を示す。

③ ライフ・イベント

McCubbin らの二重 ABCX モデルの一つの意義はストレスの累積、という概念をそのなかに取り込んだことである。ストレスの累積は、未解決の初期ストレス、対処行動それ自体、そしてライフ・イベントによって惹き起こされる (McCubbin *et al.*, 1980)。この考えから McCubbin らは Holmes and Rahe (1967) らの SRRS を受けて、FILE (Family Inventory of Life Events and Changes) を作成し、ライフ・イベントによるストレスの把握のための指標としている (McCubbin and Patterson, 1981)。

表8 ライフ・イベント

ご主人の今回の単身赴任中、あなたのご家庭では以下のようなことがら起こったでしょうか。起こった場合、それはどれくらい大変だったか教えてください。

- 1 (1) 家族のだれか、あるいは身近な人が、病気にかかったり、大けがをした
- 2 (2) 家族のだれかが結婚した
- 3 (3) 家族のだれか、あるいは身近な人が死亡した
- 4 (4) 子供が受験期 (小・中・高・大・その他) にぶつかった
- 5 (5) 家族の人が警察ざたになった
- 6 (6) 子供のようすがおかしくなった
- 7 (7) 家族の人が、学校や職場などで問題をおこした
- 8 (8) 親との同居をはじめた
- 9 (9) 家族に大きな出費 (家の購入・事業・子の入学・事故など) があった
- 10 (10) 進学・就職・結婚などで子供が家を出た
- 11 (11) 近所の家ともめごとを起こした
- 12 (12) 子供が生まれた
- 13 (13) 子供が就職した・働きだした
- 14 (14) 子供が学校 (小・中・高・大・その他) に入学した
- 15 (15) 家族に金銭上のトラブルがあった

(註) 回答は、起きなかった/なんということはなかった/どちらかといえばなんとはなかった/どちらかといえば大変だった/大変だった、の5件法による。()内の数字は、実際の調査票上での配列順序を示す。

我々もこれらを参考にして、表 8 に示したごとく 15 の項目からなる質問を作成した。15 のライフ・イベントが単身赴任期間中に生じたかどうかを尋ね、その困難性を 5 点尺度で測定している。仮説的には対処戦略としてとられる行動の量は、ライフ・イベントによる困難性の大きさによって影響されると考えられるであろう。

④ 価値観

ここにいう価値観とは、McCubbin らが meaning and coherence (意

表 9 価 値 観

次のような意見があります。あなたはどう思われますか。あなたご自身のお気持ちに最も近いものに、○印をつけてください。

● I 会社・単身赴任へのコミットメント

- 1 (1) 夫の単身赴任は、会社の都合だから仕方ないと思う
- 2 (3) 会社が成りたっていくためには、やはり単身赴任という制度も必要なのだと思う
- 3 (5) 仕事をもっている人が家族を多少犠牲にするのは、やむをえないと思う
- 4 (7) 男は、やはり仕事を第一に考えるべきだと思う

● II 家族へのコミットメント

- 5 (2) 家族はできればいつも一緒にいて、よろこびも悲しみもわかちあうべきだと思う
- 6 (4) 夫である以上、会社のことよりも本当は家族のことを第一に考えるべきだと思う
- 7 (6) 父親がいつもいない、ということは、家族の本来のあり方に反していると思う
- 8 (8) 家族のために昇進をあきらめたり、転職を考えることがあってもよいと思う

(註) 回答は、そうは思わない/どちらかといえばそうは思わない/どちらかといえばそう思う/そう思う、の 4 件法による。() 内の数字は、実際の調査票上での配列順序を示す。

味づけ・首尾一貫性)と呼んでいる概念に近い。我々はよりその含意を明確にする意味であえて価値観と呼ぶ。二重 ABCX モデルでいう C 要因はこれまでの家族ストレス論の実証研究ではあまり明確に取り扱われてこなかったが、こうした形での変数化は少なくとも可能であり、また有意義であろう。

表 9 に示すごとく、(1)会社・単身赴任へのコミットメントと、(2)家族へのコミットメントという形式的には相対立する二つの価値観について、各 4 項目ずつ計 8 項目を配置し、加算することでその得点とする。これらの項目は、要件・欲求充足水準を規定してくる変数として考えられている。

(5) 家族の適応を規定する要因

家族の適応とは既述のようにある一時点における家族の社会的要件・成員の欲求のそれぞれの充足状態のことをさす。従って初期家族ストレスで使用した項目と同様の質問について、今度は困難性の変化ではなく、現時点での充足度を問うことになる。家族の社会的要件の充足状態についての質問項目は表 10 に示すものを使用する。また成員個人の欲求の充足状態についての質問項目は表 3 に提示したものと同一だが、教示のみが以下のように変えて問われる。「こんどはあなたご自身のことについておうかがいします。ここ 1～2 ヶ月のあいだ、以下のことがらはどのような感じですか。あてはまるものに○印をしてください」。

この家族の適応を規定する要因には、初期家族ストレス、家族の構造特性、対処行動、ソーシャル・サポート、赴任後ストレッサー特性、ライフ・イベント、価値観などが仮説的に想定される。これら各項目については既に説明を終えた。

表10 家族の社会的要件の充足状態

以下のことがらは、現在あなたのご家族ではどんな感じですか。この1～2か月以内のようすについてお答えください。

● I 家 計

- 1 (1) 家計のやりくり, は
- 2 (7) 将来にむけての貯蓄計画, は
- 3 (17) 買いたい物品の購入 (教育や娯楽などへの支出も含む), は

● II 家 事

- 4 (2) 食事のしたくやあとかたづけ, は
- 5 (8) うちの中のそうじや, かたづけ, は
- 6 (15) 洗たく・アイロンがけなど, は

● III 子供の養育・社会化

- 7 (3) 子供のしつけや世話, は
- 8 (9) 子供の教育への目くばり・勉強の相手, は
- 9 (13) 子供の気持ちをくみとること, は

● IV 老親の扶養・病人の介護

- 10 (4) ご主人の親の世話, は
- 11 (10) あなたご自身の親の世話, は
- 12 (14) 病気をした (している) 家族の人の世話, は

● V 涉 外

- 13 (5) 親せきとのつきあい, は
- 14 (11) 近所の人たちとのつきあい, は
- 15 (18) 家族ぐるみでつきあっていた友人・知人とのつきあい, は

● VI 緊張処理・統合

- 16 (6) 家族でのレクリエーションや娯楽, は
- 17 (12) 家族の人のあいだの気持ちの通じ合い, は
- 18 (16) 家族の人どうしの必要な相談や話し合い, は

(註) 回答は、うまくいっていない/あまりうまくいっていない/まあうまくいっている/うまくいっている/かなりうまくいっている、の5件法による。()内の数字は、実際の調査票上での配列順序を示す。

4. 課題と展望

夫の単身赴任によって、残された家族成員、とくに妻は、いかなる困難に直面し、いかなる対処行動をとって、その困難を克服しているのか。この問いに答えを提出すべく着手された我々の研究の現論的背景と探索的分析枠組は、大略、以上のものである。

まだまだ検討の余地のある箇所はいくつもある。家族ストレスを、家族の社会的要件の充足にかかわるものと家族成員個人の欲求充足にかかわるものとに分けて考えたが、実際の調査においては、それらが家族成員の一人である（にしかすぎぬ）妻の眼を通して測定されてくる。これでいいのか——家族ストレスの測定法の問題が慎重に吟味されねばなるまい。それに、二重 ABCX モデルに依拠しているものの、今回の調査では、前危機段階の諸データは被調査者たちの回想をとおして遡及的な方法で収集されてくる。当然、データの信頼性に難点の生ずることが予想される。そしてさらには、二重 ABCX モデルに準拠させて調査計画をたてたそのことのゆえに、存外、単身赴任に随伴する諸問題を理解するのに重要な変数を取りこぼしてしまっているかもしれない。

にもかかわらず、あえて我々がこのような報告を提出するのは、一つには、声高に取り沙汰されているいわゆる単身赴任問題について、従来とは異なった、家族システムに視点を当てたアプローチの必要性を訴えることにある。すなわち、赴任者本人や残された家族成員の不都合やストレスは、パーソナリティ変数や個人属性変数との関連と同等に、あるいはそれ以上に、家族そのもののありかたや夫婦間・親子間の関係性との関連で考えられるべきであろう、との主張である。我々の研究が、家族ストレス論を取り込んだことの意味がここにある。

我が国では家族ストレス論の実証研究、特に計量的な研究は極めて限られている。これが、このような報告を提出したことのもう一つの理由でもある。McCubbin らは様々なかたちで質問紙や測定法を提示し、また彫琢

を加えている。我が国の場合、こうした努力はまだまだ足りないと言わねばならないだろう。我々の提示した質問項目も、そうした使われ方をされることを目的としているのである。

我々にとっての当面の課題は、想定される仮説命題をまず経験的に吟味し、さらに対処行動についての発見的分析を進めることにあるだろう。将来的には、今回の研究の弱点である遡及的方法も次年度以降には克服されなければならない。この研究は三年計画の初年度のものであり、今回ここで様々な御叱正をいただくことで二年目以降の継続研究に生かしていきたいと思う。

文 献

- Aldous, J. (1978) *Family careers: Developmental change in families*. New York: Wiley.
- Burr, W. (1973) *Theory construction and the sociology of the family*. New York: Wiley.
- Cobb, S. (1976) Social support as a mediator of life stress. *Psychosomatic Medicine*, **38**, 300-314.
- Cohen, S., Mermelstein, R., Kamarck, T., and Hoberman, H. (1985) Measuring the functional components of support. In I. G. Sarason and B. R. Sarason (Eds.) *Social support: Theory, research and applications*. Dordrecht: Martinus Nijoff Publishers, pp. 73-94.
- Elder, G. H., Jr. (1974) *Children of the great depression*. Chicago: University of Chicago Press. 本田時雄ほか訳。(1986) 大恐慌の子供たち。明石書房。
- 藤崎宏子 (1979) 母子寮入寮世帯の家族解体—再組織化過程。家族研究年報, **5**, 35-49.
- 藤崎宏子 (1985) 対処概念に関する理論上, 実証上の諸問題。石原邦雄編 講座生活ストレスを考える 3. 家族生活とストレス。垣内出版, pp. 363-387.
- Gottlieb, B. (1985) Social support and the study of personal relationships. *Journal of Social and Personal Relationships*, **2**, 351-375.

- Hansen, D. A., and Johnson, V. A. (1979) Rethinking family stress: Definitional aspects. In W. Burr, R. Hill, F. Nye, and I. Reiss (Eds.) *Contemporary theories about the family Vol. 1. Research-based theories*. New York: The Free Press, pp. 582-603.
- Hill, R. (1949) *Families under stress*. New York: Haper and Brothers.
- Holmes, T. H., and Rahe, R. H. (1967) The social readjustment rating scale. *Journal of Psychosomatic Research*, **11**, 213-218.
- Homans, G. C. (1951) *The human group*. London: Harcourt, Brace and Company. 馬場昭男・早川浩一訳. (1959) ヒューマン・グループ. 誠信書房.
- 石原邦雄 (1982) 家族ストレス論—社会学からのアプローチ. 加藤正明・藤縄昭・小此木啓吾編. 講座家族精神医学 4. 家族の診断と治療—家族危機. 弘文堂, pp. 343-371.
- 石原邦雄 (1985) 家族研究とストレスの見方. 石原邦雄編. 講座生活ストレスを考える 3. 家族生活とストレス. 垣内出版, pp. 11-56.
- 工藤秀幸・久谷興四郎・山田精吾・北村金三・鹿島敦・橋田保正・今井保次 (1984) 単身赴任をどうとらえるか. 日本生産性本部.
- 熊坂賢次 (1980) 行動と社会. 鳳書房.
- Lavee, Y., McCubbin, H., and Patterson, J. (1985) The double ABCX model of family stress and adaptation: An empirical test by analysis of structural equations with latent variables. *Journal of Marriage and the Family*, **57**, 811-825.
- 松岡英子 (1983) 単身赴任に関する一考察. 家族関係学, **3**, 35-40.
- McCubbin, H. (1979) Integrating coping behavior in family stress theory. *Journal of Marriage and the Family*, **41**, 237-244.
- McCubbin, H., Dahl, B., Lester, G., and Ross, B. (1975) The returned prisoner of war: Factors in family integration. *Journal of Marriage and the Family*, **37**, 471-478.
- McCubbin, H., Dahl, B., Lester, G., and Benson, D. (1976) Coping repertoires of families adapting to prolonged war-induced separations. *Journal of Marriage and the Family*, **38**, 461-471.
- McCubbin, H., Joy, C., Cauble, A. E., Comeau, J., Patterson, J., and Needle, R. (1980) Family stress and coping: A decade review. *Journal of Marriage and the Family*, **42**, 855-871.
- McCubbin, H., and Patterson, J. (1981) *Systematic assessment of family stress*,

- resources and coping.* University of Minnesota.
- McCubbin, H., and Patterson, J. (1982) Family adaptation to crises. In H. McCubbin, A. E. Cauble, and J. Patterson (Eds.) *Family stress, coping, and social support.* Illinois: Charles C. Thomas, pp. 26-47.
- McCubbin, H., and Patterson, J. (1983^a). The family stress process: The double ABCX model of adjustment and adaptation. In H. McCubbin, M. Sussman, and J. Patterson (Eds.) *Social stress and the family: Advances and developments in family stress theory and reseach.* New York: The Haworth Press, pp. 7-38.
- McCubbin, H., and Patterson, J. (1983^b). Family stress and adaptation to crisis: A double ABCX model of family behavior. In D. Olson and B. Miller (Eds.) *Family studies review yearbook. Vol. 1.* Beverly Hills: Sage, pp. 87-106.
- 南 隆男・久谷與四郎・越河六郎・奥井禮喜・稲葉昭英 (1986) いわゆる「単身赴任」とは何か—問題の所在をめぐって—. 産業・組織心理学会第2回研究大会発表論文集, pp. 47-51.
- 宮崎英子 (1983) 地域的移動と世帯分離—単身赴任とその生活—. 家庭科教育, **57**, 73-83.
- 森岡清美・望月 嵩 (1983) 新しい家族社会学. 培風館.
- 岡元行雄 (1986) 単身赴任と第一次関係の変化—筑波学園都市における単身赴任者の生活実態調査から—. 名古屋音楽大学研究紀要, **9**, 1-25.
- Olson, D., and McCubbin, H. (1982) Circumplex model of marital and family systems: V. Application to family stress and crisis intervention. In H. McCubbin, A. E. Cauble, and J. Patterson (Eds.) *Family stress, coping, and social support.* Illinois: Charles C. Thomas, pp. 48-68.
- Olson, D., Sprenkle, D., and Russel, C. (1978) Circumplex model of marital and family systems: I. Cohesion and adaptability dimensions, family types, and clinical applications. *Family Process*, **18**, 3-28.
- 大熊道明 (1985) 夫婦・家族システムの円環モデル—オルソンの場合. 森岡清美・青井和夫編. ライフコースと世代. 垣内出版, pp. 271-286.
- 大塩俊介・岡元行雄 (1985) 単身赴任の実態とその家族関係に及ぼす影響 (その1) 第58回日本社会学会大会報告要旨, pp. 376-379.
- Procidano, M., and Heller, K. (1983) Measures of percieved social support from friends and from family: Three validation studies. *American*

家族ストレス論による単身赴任家族研究の試み

Journal of Community Psychology, **11**, 1-24.

労務行政研究所 (1986) 転勤をめぐる各種取り扱いの実態 (上) 労政時報, **2803**, 2-43.

労務行政研究所 (1986) 転勤をめぐる各種取り扱いの実態 (下) 労政時報, **2805**, 2-38.

Sarason, I., Levine, H., Bashaman, R. and Sarason, B. (1983) Assessing social support: The social support questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 127-139.

Thoits, P. (1985) Social support and psychological well-being: Theoretical possibilities. In I. G. Sarason and B. R. Sarason (Eds.) *Social support: Theory, research and applications*. Dordrecht: Martinus Nijhoff Publishers, pp. 51-72.

吉田民人 (1974) 社会体系の一般変動理論. 青井和夫編. 社会学講座 1. 理論社会学. 東京大学出版会. pp. 189-238.

渡辺秀樹 (1981) 個人・役割・社会一役割概念の統合をめざして一. 思想, **686**, 9-121.